

「全鍍連」 2021年 2月号 理事長のよこがお

茨城県鍍金工業組合 理事長 溝口 輝明 (溝口鍍金(株))

「歴史に学ぶ未来づくり」



皆様、お元気ですか。 昨年から「新型コロナウイルス感染予防対策」に追われた一年でしたね。この様な目に見えない敵（ウイルス）との戦いは、地球上の歴史に度々登場し、人類が新たな挑戦とアイデアで制圧したその背景は、諸説ございます。もちろん私が申し上げるまでもありません。

現在、私達を苦しめている「変異性コロナウイルス」に対処すべくワクチン開発は、各国で行われ終息を望むところですし、私達人類の持つ叡智で制圧できると思います。

私達、企業歴史的環境においても同様の事象に遭遇し、大きなうねりに翻弄されながら打ち勝ってまいりました。

敗戦の昭和時代は、貧しかった日本経済が諸外国（特にアメリカ）の好景気に引き寄せられるように高度経済成長期を迎えました。特に、私が小さかった頃、学校教育のキャッチコピーに使われた標語は「追いつけアメリカ・追い越せアメリカ」でした。自動車・家電・ファッションに至る「モノまね商品」は悪評にさらされ信頼を失うが、大和魂で味付けしたその商品は、世界の上位を勝ち取るのです。

昭和50年代は、予想もつかない不況へと変化、成熟途上にあった経済に大打撃を与えた「オイルショック」は米ドル対円の固定相場制から変動制に移行し残念ながら企業称号を失う会社も多発した。

モノづくり低迷期から日本経済を急展開させたのが首都圏を中心として始まった「マネーロンダリング」不動産バブルです。金融界は、騒然とする好況となり日本人の大半が、中流意識を持つが、実態の無い不動産投資も横行し経済は崩壊を余儀なくされた。

時は、昭和から平成に移り負の遺産を抱えたスパイラルを清算する暗く長いトンネルに入った。この時期に大手企業は、モノづくりの拠点を東南アジアにシフトし「低コスト・高品位をターゲット」に商品開発が始まりその結果、日本の中小企業は、それに誘発されるかの様に海外展開を余儀なくされ現在に至っている。低価格で高品位の商品開発は、「大切な技術も手放す結果」となっていました。

また、先進国ヨーロッパで始まった「産業革命」は、地球を走り抜けアジアは基よりインド・アフリカ大陸まで制覇の勢いと思われれます。

その一方で地球規模の気候変動が叫ばれ、温暖化防止対策として低炭素化を目指す産業構造変革が進みつつあります。

上述のように私達を取り巻く産業構造は「造れば売れる構造から地球にやさしいモノづくり」と、限らない資源活用の3R（リサイクル・リユース・リデュース）SDGs（持続可能な開発目標）・CSR（企業の社会的責任）などを踏まえた地球環境汚染要素を限りなく低減し一人当たりの付加価値生産性を上げるモノづくりへの移行は「ニューノーマルスタンダード」として得意先や周辺企業との連携により叶えたいものだ。